

# 平成26年度 研究のまとめ

学校名: 尾道市立栗原中学校
学校規模: 16学級 520名 (H27. 2月末現在で記入)
研究教科・領域: 授業改善・英語・生徒指導

## 1 研究の概要

### (1) 研究テーマ・サブテーマ

主体的に課題解決をする生徒の育成  
 ー思考力・判断力・表現力を育成する「すべ」の指導を通してー

### (2) 研究のねらい

#### ① 研究のねらい

栗原中学校授業モデルをもとに、「書く活動」を思考と表現を結びことに重点をおいた授業3則の徹底、生徒指導の三機能の機能化に重点を置き、生徒自らが課題に気づき、解決する力を育成することで、「学力向上」を図る。

#### ② 研究テーマの定義 (本校における「主体的に課題解決をする生徒」とは)

- 分からないことはそのままにせず、分かるまで努力する生徒
- ものごとを解決したり決めたりするとき、なぜそうなるか理由を考える生徒

#### ③ サブテーマの定義 (本校における「すべ」とは)

- 思考力を育てる『すべ』は「違いに気づく、比較、分類、既習知識との関係付け」
- 判断力を育てる『すべ』は「目的を意識する、適切な情報を選択させる」そのために書く活動を取り入れる。
- 表現力を育てる『すべ』は「相手、目的、場面・条件、方法を意識させる、自己評価」

### (3) 研究反説

○栗原中学校授業モデルで、思考と表現をつなぐ言語活動(主に書く活動)の取組を工夫するとともに、思考力・判断力・表現力を育成する「すべ」の指導をすれば、生徒の思考力・判断力・表現力を育成することにつながるであろう。

### (4) 研究内容 (研究の方向)

- ①思考力・表現力を育成する指導方法の研究
- ②家庭学習の習慣化を図る指導方法の研究
- ③グローバル化対応の研究

### (5) 検証の指標

- ①ー1 調査問題等における活用問題の正解率
- ①ー2 主体的に課題を解決しようとする生徒の割合
- ①ー3 思考力・表現力の推移 (生徒アンケートより)
- ②ー1 家庭学習時間1時間以上の生徒の割合
- ②ー2 計画的に家庭学習を行っている生徒の割合

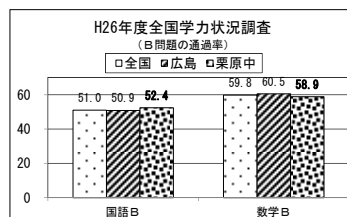
## (6) 到達目標

- ①ー1 全国学力・学習状況調査 (B問題) の通過率が60%以上
- ①ー1 「基礎・基本」定着状況調査のタイプIIの問題の通過率が60%以上
- ①ー2 主体的に課題を解決しようとする生徒の割合80%以上
- ①ー3 思考力・表現力に関する生徒アンケートの肯定的評価80%以上
- ②ー1 家庭学習時間1時間以上の生徒の割合80%以上
- ②ー2 計画的に家庭学習を行っている生徒の割合80%以上

## 2 研究の成果と課題等

### (1) 検証結果

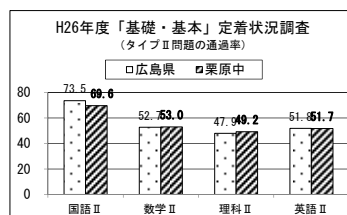
#### ①ー1 全国学力・学習状況調査 (B問題) の通過率



分かること  
 国語及び数学はほぼ全国通過率と同じ水準であるが、到達目標値60%に届いていない。

調査日時 H26年4月  
 調査対象 3年生 154人

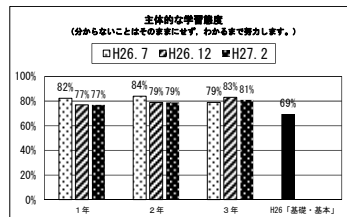
#### ①ー1 「基礎・基本」定着状況調査のタイプIIの通過率



分かること  
 到達目標値60%に届いているのは国語のみである。数学・理科・英語は県通過率とほぼ同じ水準であるが、到達目標値60%に届いていない。

調査日時 H26年6月 調査対象 2年生 182人

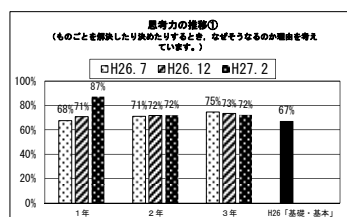
#### ①ー2 主体的に課題を解決しようとする生徒の割合 (分からないことはそのままにせず、分かるまで努力しています。)



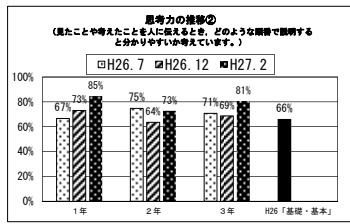
分かること  
 1、2年生は僅かに7月より減少しているが、3年はほぼ同程度である。全学年ともに県平均値を超えている。

調査日時 H26年6月 ~ H27年2月 調査対象 全校生徒 520人  
 \*これ以降の生徒対象の調査の「日時及び対象」は本調査と同じである。

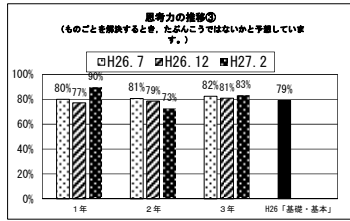
#### ①ー3 思考力・表現力の推移 (生徒アンケートにおける肯定的評価)



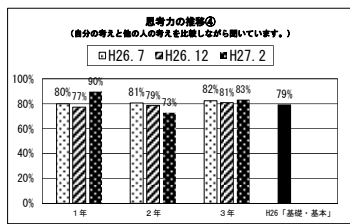
分かること  
 1年生は大きく増加し、到達目標80%に達したが、2、3年生はほぼ同じ水準で推移し、目標値に達していないが、全学年ともに県平均値を超えている。



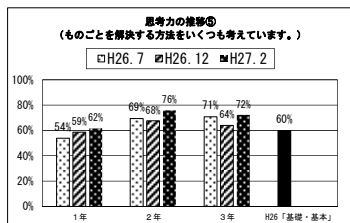
**分かること**  
1・3年生は大きく増加し、到達目標80%に達したが、2年生はほぼ同じ水準で推移し、目標値に達していないが、全学年ともに県平均値を超えている。



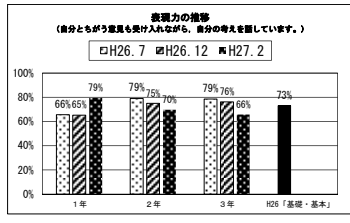
**分かること**  
1・3年生は大きく増加し、到達目標80%に達したが、2年生はほぼ同じ水準で推移し、目標値に達していないが、全学年ともに県平均値を超えている。



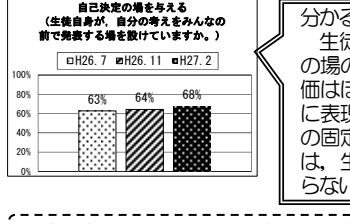
**分かること**  
1年生は大きく増加し、到達目標80%に達し、3年生はほぼ同じ水準で推移し目標値に達した。2年生減少し目標値80%は達していない。1・3年生ともに県平均値を超えている。



**分かること**  
1・2年生は増加したが、到達目標80%に達していない。ほぼ同じ水準で推移した3年生も目標値に達していない。全学年ともに県平均値を超えている。



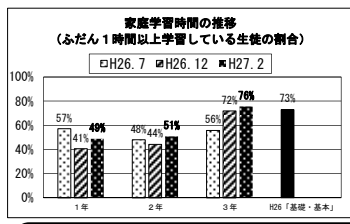
**分かること**  
1年生は増加したが、到達目標80%にほぼ達した。2・3年生は減少し目標値に達していない。1・2年生は県平均値を超えているかほぼ同水準である。



**分かること**  
生徒指導の三機能の「自己決定の場の設定」での教職員の自己評価はほぼ同じ水準で推移し、生徒に表現の場を設定していない状況の固定化が考えられる。このことは、生徒の表現力の育成につながる一因と考えられる。

調査日時 H26年7月～H27年2月 調査対象 教職員 27人

②-1 家庭学習時間1時間以上の生徒の割合

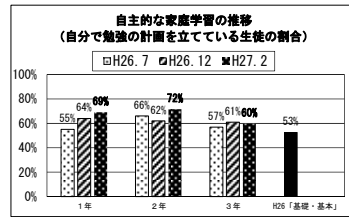


**分かること**  
3年生は増加したが、到達目標80%に達していない。1・2年生は12月よりは増加したが目標値に達していない。1・2年生は県平均値を下回っている。

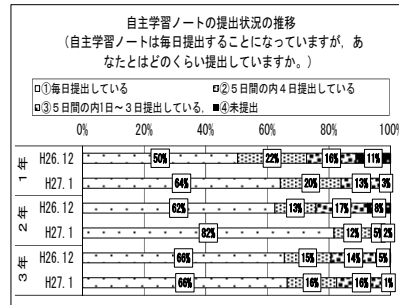
取組

適切な宿題の量及び自主学習ノート及び宿題の点検活動を行えば家庭学習時間が増加するであろうという仮説のもと、12月から全学年において、適切な量の宿題の出題と点検、自主学習ノートの使い方の指導及び提出・内容の点検を行った。

②-2 計画的に家庭学習を行っている生徒の割合



**分かること**  
1・2年生は増加したが、到達目標80%に達していない。3年生はほぼ同じ水準で推移し、目標値に達していないが、全学年ともに県平均値を超えている。



**分かること**  
全学年ともに12月から自主学習ノートの点検を厳しく行い、1・2年生は増加し、到達目標(4日以上提出生徒の割合)80%に達した。3年生はほぼ同じ水準で推移し目標値に達した。

(2) 成果

- ①全国学力学習状況調査のB問題の通過率や「基礎・基本」定着状況調査のタイプIIの問題の結果から、国語は「知識」を「活用」する力が概ね付いている。
- ②予想・比較などのすべを活用する生徒が1年生で増加した。
- ③適切な量の宿題の出題と点検、自主学習ノートの使い方の指導及び提出・内容の点検は家庭学習の時間を増加させる効果があった。
- ④研究授業後の研究協議の内容を本時のねらいやねらい達成のための「すべ」が適していたかと、生徒指導の三機能が有効であったかに絞って協議を行うことにより、具体的な改善策が明確になり授業改善を進めることができた。

(3) 課題

- ①教師主導の講義型から生徒主体の授業への改善を図る必要がある。
- ②全教職員がそろって思考・判断・表現の「すべ」を指導することができていないため、校内研修により「すべ」について理解を深め統一した指導を行う必要がある。
- ③家庭学習の習慣が未定着の生徒が多く、学習の仕方を指導する必要がある。
- ④学習遅れをしている生徒が固定化しており、個々の生徒への指導を行う必要がある。

(4) 改善の方向性

- ①全教職員がそろって生徒に思考・判断・表現の「すべ」を指導するため、また、教師主導型の授業から生徒主体の授業へ改善するため、思考・判断・表現の「すべ」についての研修、思考・判断・表現の「すべ」を明確に位置づけた授業モデルの作成、全教科で授業研究、学習指導案の作成、学習指導案の事前検討会等の研修を行う必要がある。
- ②生徒に思考力・判断力・表現力を育成するため、授業で学んだことを家庭学習で定着させる「家庭学習時間を増加させる取組(適切な宿題量・宿題の点検・家庭学習の仕方の指導等)」を行う必要がある。また、家庭学習の習慣化を定着させるために、これらの取組を1学期当初において集中的に行う必要がある。
- ③本校では教師主導の講義型の授業が多く見られるため、生徒が受け身の授業となり主体的に課題解決をする力は育たないと考えられる。主体的に課題解決するためには、授業の3則を徹底した授業モデルでの活用、生徒指導の三機能による生徒の学習意欲の向上を行う必要がある。
- ④家庭学習の習慣化の徹底を図るために、各学期毎の到達目標の設定、家庭学習の状況の把握と対策を行う必要がある。
- ⑤校区内の小学校と連携して家庭学習の手引きを作成する。